
桜の下で君に会えた（連載版）

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の下で君に会えた（連載版）

【Nコード】

N4659J

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

『桜の下で君に会えた』
の連載版です。

美桜と孝之、二人を結んだ《前世の記憶（夢）》と《枝垂れ桜》日常から少し外れた不思議な出来事。

1、憂鬱な田舎暮らしの中で。

『いつの日かまた巡り会う日が訪れたなら、この場所で会おう』

誰かが私に笑いかける。そんな夢を三日続けて見た。

三月半ばの朝六時を過ぎた薄暗い部屋。

「なんか気持ち悪い…」

三度目の同じ夢に何だか言いようのない不気味さを覚え、私はのそりとベッドから這い出して、薄暗い部屋のカーテンを開け、外を眺める。

まだ夜が明けたばかりの窓の外の景色。

田舎独特の畑や木ばかりの自然溢れる、のどかで退屈な風景。

「…なんで私がこんな辺鄙な田舎暮らしをしなきゃいけないわけ？」
景色を見つめて苛々混じりのため息を窓にぶつけてそれからくるりとそこに背中を向け、部屋の出口に向かい歩く。

「本当…最悪。」

胸のうちの理不尽さに絶えられずに愚痴が零れる。
今この場所にいる事がとても憂鬱だ。

つい数日までは、周りは賑やかな街だったのに。

親の離婚でがらりと変わった生活環境。

父親には愛人がいて、続けなきゃいけない仕事も立場もあるから、

慰謝料払うから出ていけと言われ、母娘共に住み慣れたマンションを追い出された。

そして、母の実家であるこんな辺鄙な田舎暮らしをする羽目になった。

コンビニは自転車で十五分行ったところにひとつだけ。カラオケもアミューズメントパークも大型デパートもバスに一時間くらい揺られないと辿り着く事ができない。

娯楽という娯楽がないない尽くしのクソ田舎。遊びたい盛りの十七才には島流しばりの極刑をくらった絶望感。

「…本当最悪…」
再度ため息と共にこぼれる言葉。ここへ来てから何度となくつぶやいてる。

携帯を開きメールを確認。
誰からもメールが入ってないし着信さえ無くなった。
所詮引越しちゃえば過去の人。友達付き合いなんて大体こんなものなんだと、またため息が出た。

スエットのパンツのポケットに携帯を挟込み、私は踏み締める度軋む木造の階段を降りて、一階の居間へ向かう。

古めかしい民家。

やたら間取りだけはだだっ広い。

一階は七畳の居間と八畳の部屋が襖を境に横つながりで二部屋。襖の奥は仏壇の置いてある部屋。

朝っぱらから線香の臭いがしてなんか辛気臭い。

居間の横には台所。

一応リフォームしてありフローリングのダイニングキッチンになっている。

広さは居間と同じ七畳くらいだろうか。

トントんとまな板の鳴る音と、朝食の味噌汁の匂い。

母が朝食の支度をしているんだろう。

祖父母は朝から畑仕事。

喉が渴いたから台所へ入り、食器棚からグラスを取り出して母の立つ台所へ。

「おはよう、美桜^{みお}」

母は普段通り穏やかに笑い、お決まりの挨拶を発する。

「……………」

私は母を無視して水道の蛇口を捻り、グラスに水を汲み入れて渴いた喉に流し込む。

都会暮らしでは考えられない、浄水機無しの水道水。

水だけはミネラルウォーターみたいに綺麗でおいしい。まあ、たいした感動はないけど。

私はグラスをシンクに起き、母に背を向けた。

「朝ご飯……」

「いない。」

私は、母の言葉を遮り、二階の自室へと歩き出した。

こっちに來てから、……うん、両親が仲たがいが悪くなり半年以上、母とはろくすっぽ口を聞いてない。

母を見るとイライラする。

専業主婦で良妻賢母を絵に描いたような穏やかさを演じる母。

父親（元旦那）に刃向かう事はせず、ただ暴君的に振る舞う父親

の顔色ばかり伺って笑顔を絶やさずに、嫌な事は黙って堪えて、自分を殺して我慢ばかりして……。

揚げ句の果てには浮気されて捨てられて。
それでも笑って……。

馬鹿みたいだ。

何が楽しくてへらへら笑ってんだか意味わかんないし。

二階に上がり、着替えを済ませて、私は家を出る。

こんな静かで辛気臭いところにいると気が滅入る。

学校が始まるまでの春休み、私は毎日バスに乗り街へ出る。

田舎暮らしはともじやないけど向いてない。

なり（格好）だって浮きまくってる。

キャラメルブラウンの胸下まで長い縦巻きウエーブヘアも、バッチリ決めたギャル系メイクも、ファッションだって、全て浮きまくり。

この町は私の存在を異端化させる。

だから田舎って嫌い。

私は自転車にまたがり、iPodをお供にバス停へと走る。

舗装されてないでこぼこ道がウザイ。

自転車を走らせるのに余分な体力を使う。

足太くなりそう……。

スゲーム力つくし……。

そんな事考え、イライラしながら自転車をこいでたら、パスンって音。

自転車が急にガタガタ震えて、ペダルが重くなる……。

「マジかよ……。」

自転車から降りて舌打ちし、前輪を恨めしげに睨む。

「……なんでこんな時にパンクすんのよ……。」

最悪……。

腹が立ち過ぎて自転車を蹴飛ばしたくなった。

確実にバスに乗り遅れる。

次のバスは一時間後。

「マジ最悪……。」

私は自転車を引きながら行き先を渋々バス停から町の寂れた商店街の自転車屋へと変更した。

歩いて二十分。

旧家が密集する場所の真ん中に、商店街へ下る坂道がありそこを六〇七分下ると、《丸山サイクル》と言う古めかしい自転車屋がある。

この界限で自転車のトラブルと言えばここしかない。それだけ周りには何も無い。

この町で自転車通学する学生の駆け込み寺的な場所らしいから覚えておくようにと、祖父に軽トラック（最悪！）に乗せられて案内されたこの商店街の自転車屋。

建て付けが悪いのか、店の横開きのアルミサッシの引き戸が中々開かない。

四苦八苦してると中から、

「すいませーん、今開けますから！」

奥から引き戸を開ける音と共に若い男の声と、サンダルを引っかけてずり歩くような音が近づいてきた。

「……」

男は私と近い歳くらい。身長は私（165センチ）とさほど変わらない、寝癖がついたようなポサポサの黒髪の痩せ型。

うん、田舎丸出しのダサイ男。

黒いジャージ姿…最悪。

滑りの悪いサッシの引き戸をガタガタと揺らして、ガラッと一気に引き、

「……………」

私を見て固まる。

その目はまるで異世界からの侵入者をみるような（何…コイツ？）みたいな目だった。

私はひと睨みして、

「…自転車、パンクしたんだけど。」

一言告げた。

男は、はつとして苦笑いしながら、

「あつ、ああ…、わかった。パンクね、うん。直すから……………」

若干どもるような途切れた会話を私に投げて自転車のハンドルを握り、店の中へと引き入れた。

「は？何？あんたが直すの？」

私は猜疑心に満ちた視線を投げる。

「パンクくらい直せるよ。だって、自転車屋の息子だし。」

やんわりと笑い、道具を出して作業の準備をする。

「ねえ、あんたいくつ？」

何となく黙ってるのが嫌だったから聞いてみた。

「十七。四月から高校三年。」

へえ、同じ歳なんだ。

「高校どこ？」

「北野高校。」

「……マジ？」

つぶやく私に訝しい顔を向けて首を傾げる。

「……四月から私も北野高校の三年生……。」

ため息混じりに鼻を鳴らしたら、男はガバツと立ち上がり、

「じゃあ、あんたが最近都会から越してきた噂の転校生か！？どうりでなんか格好とか派手で浮いてると思った！！」

マジマジと私を見つめて「ほえー……」とため息をつく。

面と向かつてはつきり言われると、逆にム力つかない……って言うか、あんまりコイツが間抜けた顔したもんだから、笑いさえ込み上げてきた。

越してきたのこの数日、ろくすっぽ誰とも会話してなかったし、増してやダサいけど同じ歳の男子と久しぶりに接触したからなんかどっか嬉しかったのかも知れない。

「俺、丸山孝之、まるやまたかゆきあんた名前、なんて言うの？」

丸山は自転車をいじりながら私に尋ねる。

おおきみお
「大木美桜」

手短に伝え、作業を見つめる。

「この町に少しは慣れたか？」

「全然。っーか最悪だよ……。こんな田舎。」

悪態をつく私に、

「ははは、本当びっくりするくらいなぐんもないもんな。」

丸山は笑う。

「けどよ、慣れりゃ、悪い町じゃないよ。空気は綺麗だし、のんびりと静かだし。」

「静か過ぎて気持ち悪い。夜は真っ暗だし、なんか鳥とか鳴いてる

し。」

「夏は賑やかだぞ。カエルがいっぱい鳴いて。」

「うえっ!!最悪!!」

私は顔をしかめる。

「それに、蛭がな、飛ぶのは綺麗だぞ。」

「マジ!?蛭いるの?」

「ああ。榎山神社の近くの小川は、夏は蛭がいっぱい飛んでスゲー綺麗だぞ。」

「へえ。」

「あとな、もう少ししたら、神社の御神木さんの《枝垂れ桜》が綺麗に咲き誇る。」

丸山はにこやかに笑った。

「ふーん…、ってかどこにあるか知らないし。その神社。」

「よかつたら案内してやろうか?今はまだ六分咲きくらいだけど。」

「…そうだなあ…、うん。ちょっと興味出たから行きたい。」

気さくな丸山に何となく打ち解けた私は、街に出るのはやめて榎山神社に出かける事にした。

自転車の修理を終えて、私は丸山と自転車を並べてただっ広い田んぼの中の農道を走る。

田植え前で静まり返る干からびた田んぼを横目に、丸山と談笑しながら神社へ向かう。

学校の話とか、友達のバカ話とか、聞いてるうちに何だかすっかり私は丸山に打ち解けて顔はいつしか笑顔だった。

「ほら、ここが神社の入口」

丸山は自転車を停めて目の前の小さな石橋を指さす。

「ここが夏に蛍が飛び交う場所。本当スゲーんだぞ。」

「へえ…。」

透き通る水がせせらぎ流れる小川。でもいまいちイマジネーションがわからない。だって、蛍なんて実際テレビでちらっとしか観た事ないし。

自転車を降りて、石橋を渡り鬱蒼と茂る森の上まで延びる石段に目をやる。

「…マジ？ここ昇るの…？」

なんか階段を見ただけで疲れそうになる。

「なーに、そんなに大変じゃなーよ。ま、都会育ちの軟弱者には過酷かも知れないけど。」

挑発的な笑みに私はちよっとカチンとして、

「バカにすんなよ、都会育ちでも体力は結構あるんだから。」

私は鼻を鳴らして自転車のスタンドを立てて鍵をかけた。

でも内心は、ヒールの高いブーツは失敗だったかも…と嘆息した。

薄暗い森の石段を頂上へ向かい昇る。

「なんか虫とか出ないよね…？」

霊的なモノより、虫とか爬虫類に奇襲されるのが怖くて、辺りを警戒しながら段をゆっくり昇る。

「ははっ、大丈夫だって。まだ虫が這い出す時期じゃないし。」

若干拳動不審な私を見て楽しそうに笑う丸山、ちよっとムカつく…。

バサバサッ！！

「！！！」

頭上で何かが羽ばたく音に思わず身がすくみ足が止まる。

そんな私を見て、

「お前、意外と怖がりだなあ……」

ますます愉快そうに声を弾ませ、私の左の手を取る。

「どさくさに紛れて何手え繋いでんのよ。」

軽くひと睨みしたけど、内心ホツとしてる自分を否定できずに丸山の手を離さない私に、

「あははっ、さっさと歩かないとへび出るぞっ」

脳天気言い放つ。

「いやっ！嘘っ！」

私は恐怖で丸山にしがみつく形になる。

「……………」

にんまり笑う丸山。

コイツわざと嘘ついたな……。

「最悪！」

私は丸山の背中をグーで一発殴った。

「いつてえっっ！」

悶えながらもけらけらと楽しげに笑う丸山に、私もつられて笑い声を上げた。

繋いだ手がなんかあったかくて心地良い……。

それから二三分石段を昇ると杓が並べられた石造りの手洗い場にとどり着く。

透き通る水が細い竹の筒からチヨロチヨロと流れ出ている。そこで手を洗い清めて、頂上へ向かう石段に足をかける。

目線の上には石で出来た古めかしい鳥居が見えている。

昇りつめた眼前には、艶やかと言う言葉には縁遠いひっそりとした木造の神社。その脇に否応なしに目を奪われる……。

「うわぁ……………」

思わず感嘆して声もれる。

「凄いだろ？」

丸山も感嘆気味で笑う。そして二人、それにゆつくりと歩み寄りどつしりとした太い幹。それと反して繊細な枝が半円を描き、まるで地面に流れ落ちるように垂れている。

その枝には淡いピンクの花が儂げに美しく咲いている。

所々にまだ蕾が混じってはいるけど、それでも十分に心を奪われる美しさだった。

まだ冷たさを感じる三月の風にそよぐ春の象徴に私は言葉を失い見とれてしまった。

「田舎も中々いいもんだろ？」

隣で丸山は小さく静かに笑う。

「田舎は嫌い。でもこの場所は好き…かな。」

私も小さく笑う。

その時、

『いつの日かまた巡り会う日が訪れたなら、この場所で会おう』

何故だか突然連続して見た夢がフラッシュバックした……。

初春の冷たい風。

枝垂れ桜のサワサワと揺れる音。

ずっと遠い昔、私はこの場所に誰かと見つめ合い立っていた……

…。

朧げな夢の記憶が徐々に色を帯びて鮮明に蘇る……

2、呼び戻された夢と記憶と……

時代背景はきつと、戦争中だと思う。

あの日、私は彼に会う為に人目を気にしながら、息を切らしこの神社の石段を駆け昇った。

うら若い男女が逢い引きなど、非国民だとか法度なご時世。

しかし、いつの世にだって、ご法度に逆らい人を恋しいと思う気持ちには必ずあるものだ。

見つければ酷い仕打ちに合うかもしれない。

でも、彼を想うこの気持ちは決して止める事などできない。

白い半袖ブラウス、紺色のもんぺ。長くて黒い三つ編みのおさげ髪で足は鼻緒の草履。

石段を昇りきると、神社の境内に咲き誇る枝垂れ桜の木の下で、彼は風にそよぎ揺れるその枝を、その花を仰ぎ見ていた。

私は、何故だか急に彼がこの世から消えてしまうのではないかと恐ろしくなって、彼に駆け寄り

「………」

その名前を呼び、枝垂れ桜の枝のようにしなやかで細いけれど、桜の幹のようにしっかりと強い背中にしがみついた。

「………」

彼は背中にしがみつく私の名前を呼び、召集礼状『赤紙』が来た事を告げた。

彼は「お国にの為、大切な人を守る為にこの身を……」と強い

口調を私に放った。

しかし、彼の体は微かに震えていた。

私は彼の震えを止める為に抱きしめる圧を強める。

彼は私に泣き顔を見せたくないのだろう。決して枝垂れ桜から目を離さず、私のほうを振り向く事はしなかった。

彼はただ静かに、はらはらと空から降り注ぐ花びらのように音無く泣いていた……。

口にはださなくても、理解できた。

お互い、好きでも結ばれる事なく永久^{とわ}の別れがこの先、待ち受けているかもしれないと言う事を……。

涙が渴く頃、彼は私を力強く抱きしめてこうつぶやいた。

「いつの日かまた巡り会う日が訪れたなら、この場所で会おう。そして、今度は絶対に離れる事なくずっと、ずっと……」

私は涙ながらも愛おしい彼の温もりを決して忘れるものかと体中で噛み締め刻み、その名を呼び、何度も何度も強く頷いた。

泣きじゃくりながらも、顔を上げて大切な彼の顔を心にしつかりと焼き付けた……。

穏やかで優しく、少し悲しげな儚い笑みを浮かべたその顔を思い出した……

その顔は紛れも無く、今日の前にいる丸山と同じ顔だったのだ。

隣で不思議そうな顔をして私を見つめる丸山を見て、

「…ねえ、生まれ変わりって…信じる？」

私は丸山に体を向かい合わせて尋ねる。

「…なんでまた急に？」

私は少し戸惑い尋ね返す丸山の体にそっと抱き縋り、

「こっちに越してきて、夢を見た。立て続けに同じ夢を三度も。」

目を閉じて丸山の温もりを感じ、確信した。

「…遠い昔に、私はこの場所でこうしてあなたを決して忘れないとこの枝垂れ桜に誓ったの。」

私は小さくつぶやく。

「いつの日かまた巡り会う日が訪れたなら、この場所で会おうってあなたと約束を交わした…。」

不思議な感覚だった。

口調はとても穏やかなのに、切なさで胸が痛くて…涙が止まらなかった。

私はゆっくりと見た夢全てを丸山に話した。

すると突然、風がザァーッと強く吹き、枝垂れ桜のか細い枝がゆらり、ゆらりとその身を揺らした。

その仕草はまるで、何かを語るようにも見えた。

丸山は、枝垂れ桜を見つめてはっと目を見開き、ゆっくりと私を見つめる。

その顔は、穏やかで優しく、少し悲しげな儚い笑みを浮かべた『あの日』の彼の顔だった…………。

丸山は何も言わずに私の体をぎゅっと包み、ふうわりと瞳に暖かさを宿し、私に唇を重ねた。

時間が止まるような、急激に進むような、おかしい感覚に足がふらつきそうになったけど、今は丸山の唇の温度を片時も離したくな

い。その一心だった。

速まる鼓動がひとつに重なり、窒息しそうな眩暈すらも愛おしく
噛み締めた後、ゆっくりと唇を離し、丸山と見つめ合う。

「何だろうな…、この懐かしい感じ。」

つぶやく丸山は再度私をぎゅっと抱きしめ、

「ただいま…、いや、お帰り、どっちな…？」

と私を愛おしむように目を細め笑い、丸山は小さくつぶやいた。

「…そんなのどっちでもいいんだよ。また巡り会えた、それだけで
…きつと。」

笑みと共に自然と口から言葉が零れた。

「…何だろうな、この不思議な現象は。」

丸山は枝垂れ桜に視線をやる。

「…何だろうね…。」

私も同じように枝垂れ桜に視線をやる。

お互い、口には出さないけど、気付いた。

きつと、私達はここに導かれたんだ。

あの三夜連続の同じ夢は、神の、この桜の啓示だったんじゃない
かと思う。

「私がこの町へ来たのは、偶然じゃなくて、必然だったんだ…。」

今までの辛い心の痛みがすうつと引いていく気がした。

「そうかもな…、うん、きつとそうだ。」

つぶやき笑う丸山を見て、私も笑う。

「…この町が好きになりそうな気がする。」

そうつぶやく私に

「もう、十分好きになってると思うぞ。だって、ここはかつての俺
達の故郷なんだから。」

丸山は飛び切り優しい笑顔を私に向けた。

ここで、生きよう。

前世で果たす事の出来なかった夢も、希望も、志半ばで果たした幸せも命も全て、またこの場所で、この故郷で一緒に紡いで生きていく……。

枝垂れ桜がそよぐ風に頷くように揺れる。

私は丸山の手を握り、小さく桜に向かい頷いた。

終、この町（故郷）で私は……

この町に来てから、早くも五ヶ月が過ぎようとしている。

麗らかな春を終え、新緑の季節から、夏を象徴する入道雲が空に雄大にそびえ立ち、眩しくて暑い陽射しが深緑の絨毯に降り注ぐ季節へと時間は進む。

「わあああつ！ヤバイっ！！」

私は携帯のディスプレイを見つめ、慌ててベッドから飛びだし階段を駆け降りる。

「おはよう、美桜。朝ご飯は？」

私の凄まじい足音に些か驚きながらも、いつも通りのお母さんの声に私は、

「食べたい！でも時間がないっ！！」

台所で足踏みしながらダイニングテーブルの上の茄子と胡瓜の糠漬けをひよいひよいと手でつまみ食いして、食器棚からグラスを手にとり、蛇口を捻る。

「お母さんは何度も起こしたわよ……。」
「やれやれと苦笑いする。」

「起きるまでしつこく起こしてくれればいいじゃんっ！！」

膨れっ面しながらも私も苦笑いした後、グラスをシンクに置き、
「お婆ちゃ〜んっ！！浴衣の着付けお願いっ！！」

居間の横の縁側で瓶の中のメダカに餌をやっている祖母を大声で呼ぶ。

「全くせわしない子だよ……。小さい頃の^{すみれ}董によく似てる。」
祖母はやれやれと笑みを浮かべて、私のいる仏間へと歩き寄る。

「へえー、お母さんも昔はせわしない子供だったんだ。」

「もー、男勝りで毎日ぎゃんぎゃんとうるさい娘だったさ。私もじい様も、男と女と間違えて産んだと、毎日ため息ばかりついてたよ。」

浴衣を着付けながら、懐かしみ笑う祖母。

私は意外なお母さんの過去話にけらけらと笑い声を上げる。

「孫に娘の恥ずかしい過去を話さないでよ！」

襖の向こう側から、お母さんの明るい声。

その声は昔、私がまだ小さい頃のお母さんの声だった。

母の苦労は全てわかったわけじゃない。

でも、今までずっと辛かった。その気持ちは何となくだけど解る、ううん、解ってあげたいと思えるようになった。

だからね、もう意地を張るのはやめたんだ。

素直にお母さんと向き合った。

そして、今はこの家全部がとても好きだよ。

じい様も、婆ちゃんも、お母さんも私を愛してくれる大切な家族だ。

そう思えるようになったのは…………

全部、孝之のお陰。

学校にすんなり溶けこめたのも、この町に楽しく馴染めたのも、

私の隣に孝之がいてくれたから。

都会とは違い、素朴で優しい友達。

周りに何もなくても、たわいもない事を友達みんなで沢山喋って、
けらけらと笑っている今の私がとても好きだ。

たまにバスに乗り、出かける街もやっぱり楽しい。

一人じゃなく、孝之と。

もちろん、友達ともね。

「じゃあ、行ってきますよ」

私は玄関で婆ちゃんとお母さんに挨拶をする。

「あんまりはしゃいで浴衣、ぐしゃぐしゃにしないようにね。なる
べくおしとやかに。」

母は心配そうに笑う。

「まあ、年に一度の夏祭りだから、楽しんでおいで。」

婆ちゃんは笑う。

「うんっ！」

私はひとつ大きく返事をして玄関を開けた。

玄関から出ると数メートル先の家の敷地の入口に、少々待ちくた
びれた孝之が自転車を支えにして立っていた。

「ごめーんっ！お待たせーっ！」

浴衣を気にして、控え目に手を挙げて、小走りに孝之に駆け寄る。私に気付いた孝之は、ぱっと私を見つめて顔を赤らめた。

浴衣の魔力は想像以上に効力を発揮してるみたいだなと私は小さく笑った。

「どう？似合う？」

私は浴衣の袖を掴み、モデルのようにポーズを決める。

「馬子にも衣装……なんてな。うん、可愛い浴衣だ。」

孝之はクスツと笑うけど赤らめた顔を見れば照れてる事は一目瞭然だ。

「さ、早く後ろ乗ってくれ。みんな待ってるから。」

私は孝之の自転車の後ろに横座りする。

目的地は夏祭りが開かれている、孝之の暮らす商店街。

「祭が終わったら、約束通り、二人で蛸見に行こうね。」

私は自転車をこぐ孝之にしがみつき声を弾ませた。

「ああ、二人で行こうな。」

顔は見えないけど、声でわかる。

孝之は笑ってる。

「よし、イケイケ！孝之！もっとスピード出せっ！」

もちろん私もこの上ない程、笑ってる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4659j/>

桜の下で君に会えた（連載版）

2010年10月13日13時24分発行